

## 雑事記 (35)

盛丘 由樹年

### 長屋門探訪

・少々長い前置き

この数カ月間、おりしもコロナ騒ぎの最中であり、街に出るのはばかられるし、行きつけの施設はすべて閉まっていたから、基本的に家にいて、溜<sup>た</sup>まつていた本や雑誌を読むようにしようかと思つたが、一日中では、そのうち飽きてしまった。それよりこの機会に、私は家から歩いて行ける近隣の丘陵地帯や農地を歩こうという誘惑が強かつた。

おおよそのコースを決め、大まかな地図を頭に入れて、一人で気まぐれに歩いてゆく。時間もあることだし、寄り道をしながら、ぶらつく。市街地を抜けると、畑や雑希林が広がる。車がほとんど通らない小道などを歩いていくのは、なかなか気分がいい。出会う人はほとんどいなかつた。「里山歩き」ということだろう。

私の場合、4時間歩くのが一つの目安であり、それ以上歩くと、翌日に疲れが持ち越してしまうから、ほどほどにしなければいけないが、つい深入りしてしまつたりした。ことに、山と名のつく丘陵に上るコース

では、息せき切つて、汗をかきながら登つたから、体力的には楽ではなかつた。

なお、体重を減らすことが一つの期待する効果だったが、いくら歩いても結局、体重は減らなかつたから、それは無駄な努力に終わつている。ジムなどでトレーニングをして体重を落とそうとしても効果ないと思えるから、そんなところには、私は意地でも通わないし、そもそもそんな運動のための施設は、この時期すべて閉まっていた。

途中、珍しいものがあれば、写真を撮る。持つていくのは軽量のコンパクト・カメラだから、かさばらず、ズボンのポケットに入れていた。今どきのカメラは、惜しむことなく、数多く撮れるのがいい。電池がなくなれば、交換すればいい。一つの予備電池で十分に間に合う。昔のフィルムカメラでは、シャッターを切るのにコストが気になつたものだから、隔世の感がある。写真は、どこで何を見たかと記録するためにも役に立つ。

気まぐれに歩いてゆくと、しばしば、道に迷うのが問題であり、今回もかなり遠回りしてしまい、体力的にきつい経験もした。世の中にはGPS機能付きのスマートフォンがあり、位置情報が得られるが、私は持たない。GPS機能を搭載した軽めのパソコンを持っているが、それでも持ち歩くには重すぎるし、近隣地域を歩くのにGPSに頼っては、コケンに関わる。

今回のシリーズでは、目的地へ自宅から歩いていくという「こだわり」を自分に課した。帰りにバス・電車の交通機関を利用するのはよしとする。

歩くことで、いろいろな面白いものを発見できたし、以前見たものとの変化に気づいた。

古い農家の家屋が残っていると、興味を持つてしまう。そんな風景は、いずれ見られなくなるといふ危機感もある。かやぶき屋根の家などは、貴重だ。それでも、たまに見つけることができた。

私は、お寺や神社があれば、寄ってみる。仏像などを拝観できれば、さいわいだ。だいたい鍵がかけられているから、扉の間の隙間などから覗くしかない。

斜面に掘られた横穴があれば、のぞき込んでみたくなる。戦時中に掘られた防空壕らしいものをいくつつか見つけることができた。

この雑事記を書くに当たって、そんな興味を持ったことをあれこれ紹介すると、まとまりのないものになってしまうので、一つに絞ることにした。長屋門がテーマとしておもしろそうだった。

### ・長屋門のこと

長屋門は、言葉として定着し、ほとんどの人に通用するものだろう。説明は不要かもしれないが、補足したい。

長屋門の要点を挙げると、武家屋敷の門構えとして、発達したと言われている。大名の屋敷の門などは、周囲を威圧するほど格調高く、質実剛健な造りになった。武士の格によって、長屋門の格式も差が付けられている。建築様式として確立するようになる。広辞苑によると、「江戸時代の武家屋敷などで、両側に家臣や用人の住む長屋を備えた門」とある。

武家だけでなく、各地に広がり、寺の門や一般の民家にも長屋門、または「長屋門ごときのもの」が作られた。人々を魅了するものがあつたわけだろう。

今では長屋門は、町の名所、観光スポットとして案内されているケースもある。あるいは、物珍しさで注目されているのかもしれない。でも、多くの人は、長

屋門を見ても、興味を持たないかもしれない。見方によっては、時代遅れの、無用の長物かもしれない。

長屋門には左右の部屋が一つの大きな屋根を支えている構造になっていることが基本だ。左右の部屋は、窓が有ったりなかったりして同じでなく、微妙に非対称になっていることが多い。その部屋の下半分の壁板は塗料で黒く塗られ、上半分は漆喰で白く塗られていることが多い。中央部分には、扉が付いているもの、ないものがある。扉が付いていないのは、もちろん開けっ放しだ。自由に出入りしてよいということだろう。逆に、重厚な扉を固く閉じたままで、出入りは別のところに行っている家もある。門としての実用性を失っているのだ。長屋門の、いくつかの様式については、今回紹介するものを見比べてみると、わかりやすいだろう。

私は、以前NHKテレビの番組「美の壺」で長屋門を主題に（2011年1月21日に「門」と題して）放送されたのを見て、興味を持ち始めた。建築物の様式の、美的なものとして解説されていた。

長屋門を築造するためには、それなりの財力を持つていなければならなかったはずだし、家の格式にふさわしいものでなければならなかった。長屋門は武家の

ステータス・シンボルだったかもしれない。いまでも、長屋門のある家は、それなりの「名家」なんだろう。

身分に格差があった時代の遺物かも知れないが、建築物として文化的な価値があるだろう。特に江戸時代の古いものは、文化財と登録し、維持管理、補修には公的な補助も必要だろう。

ここでは、私が偶然見つけたものや、ネット情報を調べてそれを目的にし、近隣の市や町に向いたものだ。長屋門の多くは木造建築であり、どうしても老朽化するものなので、全体的に少なくなる傾向にあるけれど、神奈川県内で探すと、有名無名を含め、まだ多く見つけられる。さらに範囲を広げると、かなりの数になる。それらをくまなく探訪するのは、私にとって無理筋だから、ほどほどにする。

今回取り上げる長屋門は、私が住む地域の近隣であり、歩いて行けそうなものに限定する。でもそれは原則であり、バスや電車を利用したところがいくつかある。以下14例を紹介する。それぞれの項目には訪れた日付をカッコ内に示す。

①中井町半分形 (2020/4/12)  
4月になって、私は中井町の比奈窪や久所への旧道を通り、半分形に入ったときのこと。



中井町半分形にある長屋門

そこで寺の門が屋敷門になっているのを見て、カメラを向けた。偶然見つけたものだ。入口が、車が通れるほどのトンネル状になっている。古いものではないにしろ、立派な作りになっている。左右の部屋は、物置として活用されているようだ。

その後、古怒田の集落を通り、曾我丘陵の浅間山（313m）を目指した。

## ②平塚市土屋・琵琶地区その1 (2020/4/25)

平塚市土屋は、私が住む秦野市南が丘からほど近い。隣の町と言っていい。とうぜん歩いて行ける。ここは広い地域であり、畑や雑木林が多く、近年、道路などが整備されてきたが、まだそれほど市街化されていない。その広い土地の一部は、学校用地（神奈川県大学のキャンパスやグラウンド）、ゴルフ練習場、老人ホーム、霊園、あるいは産業廃棄物処分場に分場利用されている。ただし、産業廃棄物処分場は、しっかりとった塀に囲われているから、中は見えない。

この長屋門は、土屋の琵琶地区の道沿いにある。平塚市の広報によると、国登録有形文化財に指定されているもので、江戸後期に造られた。埼玉東松山の寺院



平塚市土屋、琵琶地区

から移築したものである。これはかなり大きなもので、高さもある。私が全体を写真に収めるのは難しかった。



平塚市土屋、琵琶地区

③ 平塚市土屋・琵琶地区その2 (2020/4/25)

門前の左右に二体の石人が置かれているのが、興味深い。ちょうど門番のようになっていいる。この石人については機会があれば特集したい。

琵琶地区には、もう一つ、長屋門がある。前述の長屋門と距離的にも近い。200メートルほど離れているだけだ。

二つとも、道路より3〜4メートル高い土地に奥まって建てられているから、ぼんやり歩いていると見落とすかもしれない。道路から石段が付けれられ、高い位置にある。

こちらは木造の、質素な趣がある。横幅がずいぶん広いのが特徴的だ。左右の部屋には多くの物が収納できそうだ。

右端に郵便受けが置かれているのが、やや興ざめなところだ。生活感がただよってくる。門の向こうに主屋があるのだろうか、ここからは全然見えない。

#### ④大磯町上舟窪 (2020/5/03)

大磯町の北西部、虫窪地区を歩いて回った。その途中で、偶然、これを見かけた。バス停（上舟窪）のそばに、立派な門がある。

近年に建てられたものだろう。門の間にちらりと見える主屋とともに、近代的な建築に建て直されたのかもしれない。



大磯町上舟窪

城門のような雰囲気がある。屋根の上、両端にしゃちほこが見えるし、正面の中央には三角の破風が付けられている。これは城の建築様式だろう。

長屋門としてはやや異質であり、これを長屋門の一つとしてカウントするのは、少々気が引けるところだ。

⑤ 中井町下井ノ口 (2020/5/03)

大磯町虫窪へ行った帰り、バスを途中下車した。中井町下井ノ口にある長屋門の写真を改めて写真に撮りたくなった。

私はかなり以前から、この本格的な長屋門が気になっていた。二宮方面へ出るバスに乗るたびに、車窓からこれを見る。ちなみに、バスはその門前を通らず、直前でカーブする道进行する。

立派な門とは対照的に、その広い敷地内には、廃墟のようなみすぼらしい家屋が見えていた。そこには人が住んでいるようには見えなかった。それが不思議だったが、おそらく、それは使われなくなった離れの家屋であり、人の住む主屋はもつと奥の方にあり、所有している方が居られるのだろう。

私が最初に見かけたのは、もう40年ほど前になるが、経年変化したようには見えない。近年、周辺の太い木々が切られたぐらいの変化があっただけだ。おそらくそれらは、数十年前(数百年前?)に屋敷林として植えられた樹木であり、大きくなりすぎたから、切られたのだろう。切り株がいくつか一列に残っている。



中井町下井ノ口

典型的な長屋門だ。重厚な木材の扉がびつたりと閉められている。開いているところは見たことがない。

これは、二宮町や中井町の観光スポットとして案内マップに載っている。しかし「米倉寺の近くにある長



「屋門」と記されている程度で、由緒などは説明されていない。

⑥ 秦野市今泉その1 (2020/5/21)

私は例によって自宅から歩いて、途中白笹稲荷(6月になって、ヒカリモが自生していることがニュースになった。ヒカリモは黄金に輝いて見える。この時はそれを見逃した)に寄ったりしてから、南地区の今泉に来た。ここまででも、けっこう歩きがある。

湧き水がドボドボ流れ出ている「兵庫の泉」(この水はかすかにカビ臭い)をすぎ、とある路地に入ると、長屋門を見ることが出来る。同じ市内であって、ここに長屋門があることは、以前から知っていたから、私は迷わなかった。

中央の入り口を開けたままの長屋門だ。造りが近代的だから、古いものではないだろう。建て直されたのかもしれない。

門の前に塀を巡らせているのは珍しい。門が一番前面に置くものだろう。私などから見れば、余計な塀だ。せつかくの長屋門がよく見えない。



秦野市今泉その1

しかし、この場合、左側の部屋を居室にしているらしく、そこは、窓や戸がしつらえられ、実際に人が住んでいるようだ。人が住むためには、塀がないと無用心なんだろう。



⑦ 秦野市今泉その2 (2020/5/21)

その近くに、もう一つ長屋門がある。先の長屋門と同じ道路に面して、30メートルほどしか離れていないから、両方を見物するには都合が良い。



秦野市今泉 その2  
農家の長屋門

この長屋門の、道の向こう側には畑が広がっている（この地域で広い畑は珍しくなった）。この家はおそらく昔からの農家なのだろう。蔵や納屋を備え、典型的ともいえる家屋の配置になっている。このような家は、まだところどころに見られる。しかし、農家に長屋門があるのは珍しい。

左右の部屋には窓がなく、人が住むためのものではない。農具を収納する部屋としてつかわれているのだろう。屋根は互がわでなく、トタンで葺ふいているようだ。質素であり、納屋を兼ねた、大きめの門というところだろう。農家の門として違和感はない。

⑧ 秦野市三廻部みくろぶ (2020/5/21)

私は、秦野市今泉で二つの長屋門を見てから、欲張って、そのまま三廻部へ歩いて行った。ふだんなら、今泉から三廻部に歩いて行くという発想は、ありえない。同じ市内であっても、遠すぎるので。

私は若いころ一時的に、その近隣の菖蒲に住んでいたことがあり、少しは土地勘があるという自信を持っていたし、時間が充分にあるという余裕からだった。結局約6キロの全行程を歩いてしまった。実は渋沢駅

前でバスに乗るつもりでいたが、三廻部までのバスがわからなかった。路線バス（神奈川中央交通）がなかった。いつのまにか、路線が廃止されたらしい。あとで考えてみると、バスの廃止の代替手段として走っている「上地区乗り合いバス」というローカルなバスに乗ればよかった。救いは、四十八瀬川の堤の上を気分良く、才戸橋までの約1.7キロを歩けたことだ。そこでは40年前とほとんど変わらない自然が広がっていたし、棚田風の田んぼに水を引いて田植えを準備する人の姿を見ることができた。

その後、主要道路が寸断され（土砂崩れがおきた）いつのことかは不明だが、先の台風によるものだろう）大規模な工事が行われていた。第二東名高速の工事も同時進行で行われているのを見物しながら歩いた。

三廻部にたどり着いたとき、長屋門がある場所が正確にはわからなかったものだから、さらに遠回りをしてしまったことが痛かった。私は、ネット情報から、目星をつけていたところを歩いて行つたが、見つけれなかった。そこではなかった。道なりに山奥に入り込んだ。ようやく引き返す決心をしたが、雨が降り出した。傘を差しながら、みじめな気分でもと来た道を下った。



秦野市三廻部

集落に戻ってきたが、住民の方に道を聞こうにも、人の姿が全然見えなかった。ほとんどが家に閉じこもっているらしい。たまたま、戸口から出て洗濯機を操作した中年女性に声をかけると、彼女は答えてくれた。

「長屋門なら、道を下って左にあるよ」

大雑把な教えで、心もとなかったが、まもなく探し当てた。ここに行ってみたいという人のために、場所のヒントを書き添えると、長屋門のある家は、旧道(?)沿いの、三廻部集落のほぼ中央にある。

屋根が高く、大きい。扉の上に部屋がある形だ。これを見たら、あせりや疲れを忘れた。私にとって、感動的な出会いだった。

三廻部は山間地であり、すこし辺鄙へんぴなところでもある。これは「鄙びんにはまらぬ美門」として、もちあげた。

#### ⑨平塚市土屋・小熊地区 (2020/5/23)

土屋の小熊地区に、よく目立つ長屋門がある。熊野神社の近くにあつて、同じように歴史を感じさせる。

この辺りが、昔から土屋の中心部だったようだ。

これは長屋門として、堂々とした風格を備えている。重厚な造りで、なかなかの格調の高さだ。道に面した左側に並んで立派な蔵(大きく堅牢なもの)が建っているから、相乗効果で、引き立っている。閉じるための扉がついているようだが、常時開けられている。



平塚市土屋・小熊

でも、そばに寄ってみると、ところどころに汚れや傷みがあることに気づく。古色を帯びている。6年ほど前に来た時は、もっと華麗に見えたものだが……。

⑩平塚市下吉沢 (2020/5/23)

土屋の長屋門を見てから、下吉沢地区を訪ねた。このコースでは、一般道路を歩くのに気後れし、バスを利用した。車の交通量はそれほど多くないにしても、かなりスピードを出しているし、歩道が狭いので、歩くのは危険が伴う。歩くことにこだわってもしようがないから、バスに乗った。私は中沢橋で降りて、目的地に向かった。

なお、松岩寺しょうがんじ前というバス停で下りれば最短で行けるが、土屋からのバスはそこに停まらない。

案内板に従って、松岩寺の参道のような横道に入る。その途中に、右手にこれがある。標準的な長屋門であり、破損した箇所もなく、よい形を保っている。なお、オレンジに近い朱色の屋根（この地域の古い家屋に多い）は、トタン葺きかもしれない。

前面の松らしい木が傾いている。所有者は、木が倒れて門を破壊しないように、気を付けてほしい。



平塚市下吉沢

ここまで来たのなら、松岩寺に寄らなければならぬ。松岩寺で、私が本堂の扉の前で中をのぞき込もうとしていると、若い坊さんが中から近寄ってきて、扉を開け、本堂の中に入れてくれた。金色に輝く阿弥陀三尊像があった。私は、拝観だけでなく、その坊さん

から、特に古い本尊の阿弥陀如来像の由来などの話を直接聞くことができたし、仏像をカメラで撮ることを許されて、少々感激した。

なお、松岩寺から「霧降の滝」へ行くコースは、ハイキングにちょうどよい。道もよく整備されている。

「マムシに注意」などの余計な看板も多く目に付くのだが……。霧降の滝では、「水量が少ない」などと文句を言っつてはいけない。

私はさらに鷹取山（高さ219m）方面を目指したが、体力的に無理があった。もう歩きたくないと、足が駄々をこねた。我が家にたどり着いたのは、夕刻になった。

#### ⑩ 小田原市酒匂（2020/5/24）

秦野市から小田原市の海岸に近いところまで歩いていくのはさすがに無理だ。でも興味深かったから、バスと電車を乗り継いで鴨宮駅にきた。そこから南へ2キロほど歩いた。

この風格のある長屋門は、国道1号に面し、いくつかの寺が散在している地域にあって、堂々とした門構えを見せている。江戸時代後期に造られたものという

長屋門だ。



小田原市酒匂  
川辺本陣跡の長屋門

交通量の多い国道1号だから、行き交う車の中で、人はこれを見て「おっ！」と感心する声を上げるかもしれない。この道は昔の東海道であり、ここは「川辺

本陣」とも呼ばれていた地だ。これは「川辺本陣跡長屋門」と呼ばれてもいる。小田原酒匂宿の名主を務めていた川辺家が築造したものだ。

小田原市街から少し外れているが、城下町・小田原らしい建築物だ。向かって右に部屋がないことが、やや惜しい。それでも、長屋門の建築様式に基づいて造られており、専門家は十分に長屋門と呼べるという。

屋根は薄い緑色で、銅板が葺かれているように見える。高級な部材を厳選して作ったのだろう。

重厚な扉は固く閉ざされており、誰かが門の前で、「たのもお！」と大声で叫んでも、扉を開けてもらえそうもない。

扉には、看板がかけられている。はっきりと、

「幼児養護施設・ゆりかご園」と書かれている。川辺家から引き継いで、いまは「ゆりかご園」の所有になっているからだ。ゆりかご園に用事があるなら、ここからでは入れない。別の門から入らなければならない。

それなら、長屋門につけた「幼児養護施設ゆりかご園」の看板は外してほしいところだ。さらに言えば、黒い側板のところに、園の職員に関して「パート募集」などという余計な(?)張り紙が付けられている。この門に看板を掲げるなら、やはり「川辺本陣」が似つ

かわしい。

門の奥には、川辺家の主屋がある。今はだれも住んでいないという。こちらは後の時代に造られたらしいが、塀の隙間からのぞいてみた限り、大きくて立派なものだ。武家屋敷の様式を留めているという。広い「ゆりかご園」の敷地の一角で、近代的な建築の幼児養護施設に遠慮するかのように、木立に隠れてひっそりとしている。一般公開されていないことが惜しい。

#### ⑫ 小田原市小船 (2020/5/26)

小田原市の東部、二宮町に近い小船地区に、「船津家の長屋門」があるというので。私は二宮行き路線バスの停留所「団地中央」から小高い丘を越えるようにして、西へ約2キロ歩いた。途中、山林の間を通る小道があつて、気分がよかつた。中島みゆきの暗い歌の一節を口ずさむ。「♪ 旅はまだ、終わらない」

その家は下中小学校の裏手にあり、回り込むように歩くと、木立に隠れて、かやぶき屋根の一部が見える。長屋門の屋根だ。

この長屋門は、小田原市指定重要文化財になっている。門に続く道の脇には、その標柱と説明書きの看板



が建てられている。個人の所有であり、住民が奥の主屋で生活しているから、扉は開いてはいるが、入ってはいけない。



小田原市小船  
かやぶき屋根の長屋門

さすがに、全体的にしつかりした作りになっている。門のところで見上げてみると、軒の構造がよくわかる。

下を見ると、地面近くの木材が白っぽくなっている。これは雨による経年変化だろうか。

説明書きによると、上層農家（当家は代々の名主）の門として、文政12年（1829）4月に建設された。入母屋造りいりもやまのかやぶき屋根が特徴的だ。かやぶきの長屋門は、その研究者でもない私がおこがましく言うとき、他に例がないだろう。

なお、正面からでは木立に隠れて両端が見えにくいのが、左右の部屋は、他の例のように幅広いものでなく、つつましい横幅になっている。

### ⑬座間市入谷（2020/6/2）

座間は、八王子街道の宿場町として栄えたところであり、近年まで、長屋門のある家がいっつか残っていたという。

私は少々足を延ばして、小田急線で30分ほどの座間駅に行った。ネット情報によると、入谷地区の龍源寺のそばに長屋門があるというので、龍源寺に行ってみた。周辺を探索前に、たまたまその境内で、住職の方に話を聞くことができた。

「近くにあった長屋門なら、最近取り壊されて、さら



地になつてゐるよ」

「ええ？壊された？」（ああ、来るのが遅かったか！）  
「座間は宿場だったから、昔からの長屋門がいくつもあったが、ほとんど残っていないねえ。ああ、一つ知つてゐるよ。座間小学校の近くにある」

「そこはどこですか？ 行つてみたい」（手ぶらで帰らなくてすむ）

「この道を行つて、突き当りを左に曲がれば小学校がある。そこへ行けば分かる」

住職は「不審者」に対して丁寧に対応してくれた。札を言つて、道を行くと、それはすぐに見つけることができた。

石塀に囲われており、門そのものが家屋になつてゐるかのよな建屋だ。例によつて右隣に大きい蔵が見える。

そばでよく見ると、門の横に「街の景観維持に協力してゐる」という旨の札が掲げられていた。座間市が「景観」として認定してゐるのだろう。

これ以外に、まだ見ぬ長屋門を探して、私は近辺を歩き回つたが、時間が限られており、見つけられなかつた。ただし、時代を感じさせる立派な門を構える邸宅は、この辺りにはいくつか点在していた。



座間小学校の近くにある長屋門  
たまたま自転車が通りかかった

⑭座間谷戸山公園（2020/6/2）

この日、入谷地区近辺を歩き回つてから、座間谷戸山公園に向かつて歩いた。私は座間で別の長屋門を訪れることを予定していた。その公園の西側の門が、長

屋門になっていることを、私は数年前より知っていた。小田急線の、走る電車の窓からも、それがちらりと見える。(最近では、樹木が邪魔して、見えにくい) それをあらためて写真に撮ろうと思った。

小田急線の踏切を渡れば、座間谷戸山公園はほど近い。座間駅から歩いて、その門のある西入口まで10分ほどだ。

これは左右対称の堂々とした門だ。一見古そうだが、この奥にある古民家内の管理事務所の人によると、県が公園整備に伴って新築したものだという。移築したものでもないそうだが、どこかの長屋門をモデルにしたものだろう。特徴的なのは屋根だ。左右の部屋と中央の門の屋根が一体でなく、それぞれ瓦屋根を持つている。中央の屋根が大きく造られている。

県立座間谷戸山公園は、広い範囲で自然環境がよく保たれている。遊歩道や野鳥の観察台などが整備されている。(ただし、人の手を加えすぎるのも自然にとつてよくない) この日は平日ながら、散歩する中高年の人が多く見られた。犬を連れての散歩もここでは許されている。

ときおり鳥やカエルの声が聞こえてきた。ただ、小田急線・電車が走る音と、上空から厚木飛行場に離発

着しようとする米軍機の音が入り混じるときがあり、耳障りかもしれない。



座間谷戸山公園西入口  
夫婦と思われる二人が門をくぐっていた

## 新型コロナウイルス・カタカナ用語集

2019年末に中国で新型コロナウイルスによる感染症が確認されてから、みるみる感染が拡大し、世界中を駆けめぐり、大流行になった。日本では2020年1月から、そのウイルスに感染した人が報告され、増え始めたから、大きな社会問題になった。

それに伴い、新しい言葉が多く使われるようになったので、ここにまとめてみたい。特にカタカナ語に絞って補足的解説を加えてみる。

### ・コロナ(corona)

コロナといえば、「新型コロナウイルス感染症」を指す言葉になっている。新聞の見出しなどでは、「コロナ関連」として、コロナ禍、コロナ危機、コロナ騒動、コロナ不況、コロナ休業、コロナ失業、コロナ恐慌、コロナショック、コロナ猛威……と、他の危機的状態を表わす言葉と組み合わせられて使われている。

言いやすい言葉なのだろう。しかし、それは略称・ニックネームのようなもので、厳密性はない。この感染症の正式名は、COVID-19だ。正式名であり

ながら、ほとんど広まっていない言葉だ。この感染症は、広まっているのに……。それが新聞などの紙面に載ることはあっても、話し言葉として「コヴィド19」と口にする人は少ない。

世界保健機構(WHO)が、この疾病の名称をCOVID-19とした。COVID-19では、記号化された文字列だから、分かりにくいのだ。学術書に記載するには、それでいいかもしれないが、言葉としてはなじまないようだ。WHOでは、最初に発生した地名や、由来する動物の名前などは、病名の中に入れてい決まりになっている。

具体的な地名などを疾病名にすると、その地域全体が「汚名」としてこびりつくことになり、どうしても差別や偏見が生じてしまうからだと説明されている。いわゆる風評になる。過去に、「スペイン」「香港」などを冠した病名を付けた失敗を教訓にしている。

そのため、わざと味気ない記号の羅列にしている。一部の人(アメリカの高官や、反中の論者)がこれを「武漢ウイルス」と公言しているが、それでは武漢の住民が気の毒だ。武漢では強権な政府によっていきなり都市封鎖されたのだから、悲惨な被害者たちだ。武漢ウイルスと言っては、更なる悪評を貼り付けるよう

なことだろう。

コロナの語源はラテン語で「冠<sup>かんむり</sup>」のことだ。西洋式の王冠には、その周囲に、複数のとがった飾りが付けられている。それに派生して多くの事物の名称に用いられている。太陽の表面から吹き上がるガス状の光る部分も、そのコロナに似ている形だから、「コロナ」と名付けられた。トヨタの車名に用いられたことがあるし、日本の会社の名にも用いられているというから、本来は、好感度の高い言葉なのだ。ウイルスや感染症の名に用いられたことで、好感度をぐっと下げた。

#### ・コロナウイルス

このウイルスはコロナウイルスの一種だ。ウイルスを電子顕微鏡で見ると、その球状の本体に、王冠（コロナ）のようなトゲトゲがついている形だからといわれている。

インフルエンザなら流行時期の季節性があるのだが、このウイルスにはそれが無いのが不気味だ。

コロナウイルスによる疾病として、2003年3月に世界的に知られたSARS（重症急性呼吸器候群）がある。その当時も「新型コロナウイルス」による感染症だと報道された。SARSも重篤な肺炎を引き起こしたから、症状も似ている。「新型コロナウイルス」

と、言葉では同じ表現だが、今回のウイルスとは、どう違うのか、興味深い。近縁種なんだろう。ともあれ、SARSで「新型コロナウイルス」とされたのだから、COVID-19ウイルスは「最新型、新型コロナウイルス」といえるべきかもしれない。

そもそも、ウイルス自体は弱い「生命体」であり、単独ではどうすることもできない。人などの動物の細胞の中に入り込み、その細胞内の機能を用いて自身身を複製している。その複製機能を持つているのは、限られた時間しかない。寿命というべきその期間をすぎると、無害な「物質」になる。空気中での飛沫では3時間、物に付着しているときは、24時間ほどというアメリカでの共同研究チームによる実験結果があるという。むやみに恐ろしがっているのは、身が持たない。

感染しても発症しない人がいる。発症した場合、1週間程度かぜのような症状が続く。2割は1週間から10日ほどで肺炎症状が悪化し、うち2〜3%が致命的な症状になる（4月24日の朝日新聞より）。

#### ・エアロゾル

空気中の飛沫よりさらに細かい粒子のこと。ウイルスはこれに着いて空气中を漂う。これで感染する可能性があるとされるけれど、部屋の中を換気すればよ

いとされる。

・パンデミック

一般的な感染症の流行の場合、エピソード (epidemic) が用いられるが、大流行の場合、パンデミックという。パンデミックかどうかは、WHOが判断するものなのだろう。今回の感染症の場合、パンデミックそのものだから、異論はないだろう。コロナ・パンデミックだ。

・アウトブレイク

感染症が発生し、流行し始めること。

・オーバーシュート

感染爆発。感染者の数が急激に上昇すること。

・ホットスポット

感染者が発生しやすい特定地域のこと。メディアでは、新宿エリア、池袋エリアと表現されることが多い。

歓楽街の町名を直接名指ししないところが奥ゆかしい。

・クラスター

クラスターといえば、私はクラスター爆弾を連想してしまうのだが、爆発することに関しては、「当たり前とも、遠からず」のことかもしれない。これは集団感染のことだ。クラスターは「集団、集合」を意味する。特定の施設や店舗で、感染者がまとまって複数発

生することをいう。クラスターの発生源はたった一人の感染者だったかも知れないが、その人が周囲の複数の人に移してしまう状況がある。人が多く集まる場所や施設で起こりえる。

・ソーシャルディスタンス(社会的距離)、

コロナ対策として、3密(密閉、密集、密接を防ぐための一つの規則だ。

これを言い出した人は、なじみ深い言葉の「ソーシャル」を、ディスタンスと安易に結びつけたのだろう。

例えば、ソーシャルネットワーク、ソーシャルメディア、ソーシャルワーカーなど、「ソーシャル」が他の言葉と結び付けられ、新語として意味をもたされている例が多い。ソーシャルネットワークでは、特定の「オンライン通信」の意味になっているし、ソーシャルワーカーでは、福祉の意味を帯びている。

私は、なぜソーシャルなのか、疑問を持っている。おそらく、「ソーシャル」をつけた方が、響きがいいからといった単純な理由だろう。

この場合でも、これを言葉通りに解釈すれば、「社会から距離を置くこと」であり、「人間関係を疎遠にすること」のイメージがでてくる。言葉通りに解釈したい私としては、違和感を覚える。人間関係に距離

を置くこと、人との付き合いを疎遠にすることが推奨されているのだろうか。

もちろん、そんな逃避的な意味ではなく、この場合、単に人との距離を保つことを言っている。「社会のための距離」と理解すればいいようだ。コロナ対策として、物理的に人と人との距離を1・8〜2メートル保つこと（ドイツでは1・5メートル）、間隔をおくことだ。半径1・8〜2メートル以内は、オレの縄張りだから、他人は近付くな、ということかもしれない。

それなら、フィジカル・ディスタンスとするのがよさそう。身体的距離だから、本来の意味に近い。その他、言い方を変えようとする案が出るが、もうかなり浸透した言葉なので（世界的標準語になっている）、変えられないようだ。

### ・ステイホーム (Stay Home)

「家にいる！」「外出するな！」ということ。ステイ・セーフ、ステイ・ア・パートなど、ステイホームから派生した言葉がいくつか出てきている。似たような意味の言葉として「巣籠り」「お隠り生活」がある。

何といっても、ステイホームの言葉が定着している。そして「不要不急の移動を控えること」が、合言葉になった。推奨であったり、自粛（自主隔離）の要請で

あったり、命令レベルの強制であったりする。移動・外出を規制するものだ。規制に違反すると、罰則が伴う場合もある。外出禁止令 (Stay-at-Home order) だ。自宅での隔離生活となる。

とはいえ、私が外出する場合、すべて「必要緊急」だと思えるから、堂々と行きたいところだ。要は、感染する可能性のあるようなところへ行くのを避ければいい、と心得る。

主に、人の移動によって、ウイルスも運ばれてゆくのだろう。県境や国境をまたぐ人の移動には、規制がかかる。そして、そんなとき差別感情が芽生える。排他的になる（排外主義）。どうしてもよそ者、部外者、異邦人たちは嫌われる傾向が強くなる。こんなとき、彼らはウイルスを持って来た人たちと思われるしまうのだから、たいへんだ。

ある市議員が「感染者は殺人鬼に見えます」と言ったのは、怖がりすぎだろう。

うかつに町を歩けなくなる。世の中が殺気立ってきた。例えば、マスクをしてない人に、あるいは「コロナ、コロナ」と声高にしゃべる人に、人々は敵意をみせる。

「自粛警察」と呼ばれる人が現れたのが話題になった。

彼らは、コロナの見えない影に怯えて、余計なおせっかひ的ふるまいに出る。ときには攻撃的ふるまいに出る。自粛していない人を取り締まるのだ。彼らはそんな人を非国民としてバッシングの対象にする。それは、日本で昔からかなりの強制力を持って人々を規制する役目を果たしてきた。

営業の自粛を要請されているのに、あるいは営業時間が規制されているのに、店を開けているのを見ると、嫌みたっぷり紙片を張り付け、あるいは陰湿な嫌がらせをしたりする。

「コロナを何だと思っているのですか」

「あなたの店だけ営業して、さぞや儲かることでしょう」

周囲に人がいる中で、咳でもしようものなら、「コロナヤロー！ コロナを移す気かよお」と、全員からにらまれてしまう。そんな人に、口答えしようものなら、彼らは逆上するだろう。「テメー、こら、死ぬ！」「コロナにかかって死んでしまえ！」

「クッソー、オメーは道連れだ、ゴホンゴホン」

「ヒェ〜」

他県ナンバーの車が近隣に止められていると、それ

に激怒する人がいる。

「コロナヤロー！ わが県にコロナを持ち込んで来たなあ、こんな車、ぶっ壊す！」

ただし、彼らは心の中でそう叫んでも、運転者に直接文句を言うことは少ない。運転者がいないのを確認してから、おもむろにサイドミラーをひねりちぎったり、コインで車体に傷つけたりする陰険な行為に及んでいる。あるテレビ番組では、バイクのアクセルケールがカッターのようなもので切断されていた例が紹介されていた。そういう嫌がらせになっている。

#### ・リモート

リモートとは遠隔であり、通信技術を用いた「働き方」「学び方」「集会」の改革がそれぞれ進んでいる。

オンライン、リアルタイムで、遠隔・在宅で生活する方式が促進されている。人々が異動せずにすむものだ。

テレワークも普及している。リモートワークとも呼ばれる。在宅勤務だ。授業も、演奏会も、医者による診断も、リモートで行なえる。オンライン授業も増えている。

アプリ（ソフトウエア）が充実して一般の人が使いやすくなっている。通信・連絡・広報などのために、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）がよ



く使われる。ツイッター、LINE、インスタグラム、フェイスブック、ユーチューブなどを総称してSNSという。

機器の画質や音質も良くなっている。たとえば、新たなテレビ会議システム(Zoom)を使えば、人々が一カ所に集まらずにすむ。

#### ・エマーゼンシー・ステート

日本で宣言するときは、「非常事態」の用語を用いず、「緊急事態」に統一している。政治的な配慮が加わっている。言葉のすり替えを行って法律を通すのは、自民党の得意とするところだろう。

「緊急事態」というより「非常事態」の方が、一般的には耳慣れたものだろう。緊急事態宣言と非常事態宣言とどう違うかという点、意味的には違いはないのだ。

非常事態宣言の言葉に対して、戦前の記憶を思い出され、拒否反応を示すような人がいるために、日本政府は言葉をすり替えた、と言えるだろう。かつて非常事態だと言って国家が強権的、高圧的な力をふるったことで、人々に悪い印象を植え付けたわけだ。

今回、「新型インフルエンザ等対策特別法」に新型コロナウイルス感染症を含める改正法案が、緊急事態宣言を可能にした。2020年3月12日、13日に、

それぞれ衆議院、参議院で可決した。

緊急事態宣言をすることによって、政府は事業者に対しては営業自粛や休業要請を、一般人に対しては外出自粛、在宅勤務を推奨することなどが可能になる。

そして2020年4月7日、安倍首相が宣言した。公的な施設はいっせいに閉館になった。公園も公営の運動施設も入場禁止になった。ある自治体の公園には、「緊急事態宣言発令中」の紙が貼られていたという。

政府・公官庁にとつて、大義名分のもとで、ふんだんに予算を使うことができるから、好都合なんだろう。給付金・助成金・支援金を派手にばら撒く。いつもは財難で支出が抑えられている政府が、この時とばかり、大盤振る舞いの歳出を決めている。各省庁は便乗して「不要不急の予算」を計上している。

#### ・ロックダウン

都市封鎖だ。中国の武漢で都市封鎖が行われたというニュースには、驚かされた。いきなり、すべての交通機関が遮断されたのだから、都市生活者は、収容所に押し込められたのと同じ境遇になったと推測される。民衆に対して、有無を言わず強権をふるう中国政府の力強さを見せ付けた。

#### ・ロードマップ

「道路地図」のことではない。工程表の意味にちかいかい言葉として用いられている。緊急事態宣言により強めた規制や禁令を、感染の収れん状況を眺めながら、徐々に緩めることをいつている。計画的であるが、感染の収れんの見通しは不明に近いから、いつ到達するかは分からないもどかしさがある。

業者に要請した休業や営業時間の制限など、感染拡大防止対策のための施策を段階的に緩和することだ。感染リスクの高低や、生活の必要度で分けたグループごとに、緩和の時期の遅い早いを職種や店舗の種類によって決める。娯楽を提供する施設などは、一番後回しにされる。単に「緩和計画」あるいは「緩和手順」といわないのが、新しい。

#### ・エクモ（体外式膜型人口肺）

ECMOという人口呼吸器だ。患者の肺の代わりに血液中の二酸化炭素と酸素の交換を行なう機器だ。患者には血液を取り出すためチューブと、二酸化炭素・酸素を交換した後の血液を送り込むためのチューブを取り付けることになる。

重症者は、肺機能が低下し、死に至る危険がある。それを機器が補助し、代わりとなる。患者の救命に有効とされており、実際に役立っているという。ただし、

エルモでも救えなかった例がいくつか聞こえてくる。医療の限界だから、親族としては、あきらめなければならぬ。

#### ・アビガン（新型インフルエンザ治療薬）

新型インフルエンザ治療薬として2014年に国内で開発され、販売が認められたものだが、コロナウイルス感染症にも回復を早めるという研究結果が得られ、3月末から治験を進めている。一部の病院で医師による観察研究として処方されている。7月現在、明らかに有効性が確認されるまでに至っていない。なお、動物実験で胎児の死亡や奇形の子どもが生まれたことが懸念材料だ。

#### ・レムデシビル（エボラ出血熱の治療薬）

エボラ出血熱のために開発された抗ウイルス薬だが、副作用があり、有効性の証明が難しかった経緯がある。コロナにおいて、4月までの臨床試験では、平均的に、症状の回復を早める結果が出ているというが、死亡率の差は見られていない。

5月になってアメリカのFDAが、重症の入院患者を対象とし、緊急時の使用許可を出した。それに引き続き、厚労省も「特例承認」の手続きに入った。

#### ・ココア（接触確認アプリ）

スマホのアプリで、COVID-19 Contract-Confirming Application を略したCOCOAをカタカタ読みしたものだ。飲料のココアと同じ名前にしているものだから、少々紛らわしい。既に導入していた他国の類例を報道していたメディアは、感染追跡アプリと称していた。

厚生労働省が主体となって無料で提供している。世界の先例に基づき、個人情報扱いに気を配りながら開発したという。7月1日にAndroid版の修正バージョン「1.1.1」を配布し、ほぼ実用化した。利用者はそれをダウンロードし、設定項目を入力する。

スマートフォン同士が近接したとき、スマホが自動的に近接通信機能 (Bluetooth) を使い、おおよそ1メートル以内の距離で15分以上継続した場合を「接触」と判定し、記録する。

感染状況とそのスマホの持ち主を一元管理する政府側の情報と、スマホの記録を照らし合わせて、感染者と接触したか否かが所有者に分かる仕組みだ。

スマホ操作すれば、自分が以前に(14日前からの)接触した人の中に陽性者がいたことをすぐに知ることができる。それなら早速、自分が感染したかどうか確認するために、PCR検査などを受ける必要がある。

接触者のなかに陽性者がいなかったなら、安心だし、感染したとしても、それをいち早く知ることは、ウイルスを抑えこむ対応が早めに行なえるから、有効なのだ。早めの治療を受けられることになるし、他人や親族に感染させないように隔離生活に入れるだろう。この仕組みを思いついた人は、偉い。

スマホは、ほとんどの人が(特に若い人は100%近い)持っている物品だから、そのすべてがココアをスマホに組み込んで活用すれば、感染者と接触したかが、かなり正確に知ることができる。普及が期待される。

このアプリの場合、感染者がそばにいることがいち早く分かる機能はもっていないようだ。スマホが「感染者が近付いてくるよ! そばにいるよ! ピッピー」などと警報を発することも技術的には可能のはずだ。そうなれば、感染者は、スマホを持って、もう町に出歩けなくなる。すると、スマホを持っていない者は感染者とみなれたりして……。

#### ・アマビエ(妖怪)

伝説上の妖怪の名前だ。江戸時代に熊野沖の海上に現れたとされる半人半魚で、長い髪、くちばし、三つの尾ひれを持っている。これが現代になって、コロナ

に關係して脚光を浴びている。

コロナの収束を願う人々の素朴な思いが、この妖怪を引っ張り出したといえそうだ。人々は「疫病退散」のために、アマビエの持つ妖術にすがる思いをいいただくかもしれない。

実のところ、人々は面白半分にアマビエを持ち上げているところがある。コロナを退散させることを真に受けて期待しているわけではなく、明日雨が降らないように、てるてる坊主を軒下に吊るす類いの、まじない感覚で、アマビエをもてはやしている。

アマビエに関する出典としては、江戸時代の瓦版かわらばんになるといふ。それには、妖怪アマビエが熊野沖の海上で船のそばに現れ、「疫病が発生したとき、私の写し絵を掲示しなさい」と船員に告げたという伝承とその絵姿が書かれている。それが魔よけの「お札おまじ」になるようだ。どうやら、瓦版の販売拡大目的で創作されたものと考えられる。

最近、アマビエ人気に便乗するような、いくつかの商品が出されている。コロナショックにめげない商魂のたくましさをみる。

テレビにも、アマビエ三姉妹と称するアニメのキャラクターが出てきた。政府系の団体がスポンサーにな

っているらしく、3密を防ぐための注意喚起的な広報だった。若い女性のイメージのアマビエたちがそのために演じていたのは、ぴったりの役柄と思えるから、私はそれを登用したことのアイデアに感心しつつ、おもしろく見た。

(2020・7・12)